

教育研究所だより

守山市教育研究所発行

平成31年3月20日 No.213 所長 西川 典子

守山市勝部三丁目9番1号 (守山市生涯学習・教育支援センター 愛称:エルセンター3・4階)

E-mail kyoikukenkyl@city.moriyama.lg.jp Tel 077-583-4217 Fax 077-583-4237

H P http://www.city.moriyama.lg.jp/kyoikukenkyl_index.html



「言葉は魔物・宝物」 ～言葉ひとつでこう変わる～

羽川 英樹 氏 (元読売テレビアナウンサー)

僕は今、人と人がゆるくつながることが大切だと思っている。ちょっとした声掛け、挨拶、気づかいなどだ。

—守山市教育研究発表大会 教育講演 ダイジェスト版— H31.2.6 守山市民ホール 小ホール

●教えるから伝えるへ ～聞き手に伝わる3つの法則～

①聞き手のリズムを考えて対話をキャッチする

相手の興味や疑問をもっていることから話をするQandA (質問と回答) 方式で、話をすることが大切。授業もいきなり説明するのではなく、何か共通の話題を投げかけ聞き手に集中してもらえるように進めていくことが必要である。

②結論から先に言う

話をする時は結論を先に話し、自分の態度を明らかにすると聞き手にとってわかりやすい。最近のメディアの司会者は心得ているため、聞き手が注目する。

③数の予告

「これから大事なことを3つ言います」と数を予告すると聞き手の頭の中には3という数が浮かぶ。聞き手にとって「聴く」という準備ができるのだ。

●プロはここに気を付けて言葉を選ぶ

①的をしぼる

何かを話すときに、これが伝わればよいというものを決めることである。惹きつける言葉 (キャッチ) を考え、伝えることだ。要点のない説明ほどわからないものはない。

②見える化

映像が話の中で浮かぶことも大事だ。「ご出身は？」の問いに「四国です」では映像が浮かばない。「徳島の海岸沿いです」と話すことで、聞き手には情景が浮かぶ。

③具体化

「びわ湖一周の距離は？」の問いに「240 kmです」では距離感が伝わらない。具体的に「守山から東海道新幹線に乗り、東に向かって浜松を超えたあたりです」と説明すると距離感がつかめる。

④語感

若い子は残り時間を「あと3分 (ふん) です」と言う。わいわい世代は「あと3分 (ぶん) です」と言う。パン屋→ベーカリー、ジーパン→ジーンズ→デニムなど、使う言葉で世代がわかる。聞き手にわかりやすく伝えるために、使う言葉を選ぶことが大切だ。

●信頼とやる気を起こす効果的なコミュニケーション話法

①語尾の繰り返し

お父さんが「もう疲れて、くたくたやわ」という言葉に、お母さんが「そうやね。大変やね」と愛情を込めて、言葉の語尾を繰り返すような発信の仕方が大切だ。お父さんの辛さやピンチを共有することで信頼関係が構築され、お父さんのやる気が出てくる。

②認め、ほめる

人は気付いてくれたことや変化を察してもらうことによってうれしく思う。結果が出てからほめる場合もあるが、その人が今、取り組んでいることを質問し変化を認め、ほめると効果的である。

③叱る

長く叱らない、人前で叱らない。叱った後の声掛けが大切である。だめだしではなく、信頼して叱ることによって人は成長する。

④傾聴

話の途中でうなづきや相槌は必要だが、できるだけ本人にしゃべらせることが大事だ。聞き手には最後まで結論を言わない方がよい場合もある。

⑤プラスの言葉

同じ条件でも人はプラスの言葉で言う人とマイナスの言葉で言う人がいる。相手に不快感を抱かせないように言葉を選び、プラスの言葉で言うことが大事である。

研究発表報告

●教育に関わる調査研究

「子ども理解をすすめるための教育相談アンケートの開発とその活用」

小中学校で活用できる教育相談アンケート（共通アンケート）を作成しました！

守山市内の小中学校では、学習や生活、困っていることや気になることなどについて、先生と子どもが定期的に話し合う教育相談を実施しています。

一対一で話し合うことで子どもと先生の絆が深まったり、問題の早期発見ができたりする貴重な時間です。しかし、会話が続きにくかったり、自分の対応でよかったのか悩む先生がいたり、相談時間が足りなかったりと、多くの課題があることもわかってきました。

そこで、市内小中学校から13名の研究協力員に集まっていただき、子どもを多面的に理解するための市内共通アンケートを作成し、その活用に向けて研究を進めました。

実際に共通アンケートを使用して教育相談を実施した先生方からは、「子どもとの話が弾んだ」「好きなものや得意なことから話を始めると子どもたちが笑顔になってくれる」「子どもが困っていることを知り、トラブルになる前に対応できた」など、共通アンケートの効果を感じる声が多数寄せられました。

次年度も引き続き教育相談について研究を進め、先生方の教育相談に関する力量を高めていきたいと考えています。

（担当所員：植村有子）

共通アンケートの一例

●指導力向上に関する研究 1

「電子黒板を効果的に活用した小学校外国語授業の進め方」

～楽しく学びながら、コミュニケーションを図ろうとする態度を育てる～

学習指導要領の改訂により、平成32年度からは小学校中学年に「外国語活動」が、高学年に「外国語科」が導入されることになり、今年度より2年間の移行期間が設けられている。授業では、デジタル教材を活用しながら進めることになっているため、今年度の研究では、電子黒板の効果的な活用方法を探りながら、実践を重ねた。電子黒板の効果的な活用例については、以下の通りである。

- デジタル教材（チャンツやLet's Listen, Watch & Thinkなどの音声や映像）の使用
- 単元計画や授業の流れ、本時のめあて、大切なポイントの提示
- Small Talk や発表（スピーチ）で扱う内容に関係のある写真の提示
- 新出語句導入の際に補助となるイラストと文字の提示
- ゲームやクイズなどのアクティビティでの使用

児童の実態と活動内容に応じてパワーポイント等をうまく活用することで、楽しく学びながら、コミュニケーション活動を円滑に進める役割を果たした。児童も、先生が電子黒板を使用しながらの授業は楽しいとアンケートで回答していた。電子黒板の活用は音声や絵、動画などの映像が英語理解の手助けとなっているだけでなく、どの学年の児童も文字が書かれていると、先生が今何を話しているのか、どの部分を歌っているのか手掛かりになり、わかりやすいという意見が多かった。このことから、中学年から絵と同時に文字も表示することが望ましいと考えられる。しかし、その際、電子黒板をどの児童にとっても見やすい場所に配慮する必要がある。

また、今回の学習指導要領の改訂により、音声から文字への指導においては小学校高学年から始まることになった。来年度は、高学年の指導において「アルファベットがもつ音と文字の指導」、「4線以上に書く指導」などを取り入れた継続的な活動（帯活動）内容についても、研究協力員と共に検討していきたい。さらに、今は移行期間であり、各小学校において移行措置や先行実施が行われている。新学習指導要領全面実施の授業時数を受けてきた児童が中学校へ入学する2024年度まで、学習内容や総時間数が各小学校、各学年によって異なる。今まで以上に各校区内の中学校教員と小学校教員との交流を図ることが必要であることから、小中連携についても取り組んでいきたい。

（担当所員：三輪さおり）